

平成22年度
モビリティ・マネジメント教育（交通環境学習）にかかわる学校支援制度
琉球大学教育学部附属小学校 実施結果概要

（様式3-2：モビリティ・マネジメント教育（交通環境学習）にかかわる学校支援制度 実施結果報告書）

実施結果報告書

1. テーマ： 「めんぎ〜れ〜沖縄県、私たちの島の歴史」		
2. 実施教科等： 社会科・総合		
3. 関連単元： 別紙（P1参照）特に「自然環境と生活との関係」		
4. 実施授業時数： 全33時間		
5. 実施学年・クラス 4年3組	6. 児童生徒数	37名
7. 実施内容 別紙参照以下より。		

第4学年社会科指導案

社会科研究部 山内 かおり

1 単元名「めんそーれー沖縄県 私たちの県のよさ」(全33時間、総合7時間を含む)

2 単元について

社会科3・4年単元「わたしたちの沖縄県」について新しい学習指導要領においては、「ア自県の国土における位置、47都道府県の名称と位置、イ県全体の地形や主な産業、交通網・都市の配置、ウ特色ある地域の人々の生活（自然環境を資源として生かしたまちづくり、伝統・文化を資源として生かしたまちづくり）、エ国内の他地域や外国とのかかわり」の4つの小単元学習を通して学ぶことになっており、自分たちが住む県のよさを広い視野から理解し、県民の一人としてまちづくりに関わっていこうとする公民的な資質を育む大切な単元である。しかし、内容のアとイに重きを置けば、範囲が東西600kmに広がり、島々が多い自県の場合は容易ではない。ともすれば単に県の地理的知識の単純な理解にとどまることも予想される。また、内容ウのまちづくりの事例の学習を通して学習に至っても単に資源として生かしたまちづくりの事例学習に終わりがねない。自分たちが住む県の資源（よさ・魅力）に気づき、積極的に関わっていこうとする意識を育むには、「自分ごと」として県のよさや魅力に気づき、関わっていこうとする何らかの学びの窓口が必要である。そこで沖縄県の場合、リーディング産業である「観光」を窓口として設定し、自県の地理的知識を観光地の情報と重ね、自然や伝統・文化という資源を生かした観光の視点から捉え直すことで県民の一人として主体的に自県のよさや課題を追究できるのではと考えた。

沖縄県は、亜熱帯気候に生まれ、自然の美しさや独特な文化や人に魅せられた多くの観光客が訪れ、日本を代表する観光立県である。沖縄への観光は、団体観光客による一回限りの首里城や美ら海水族館見学だけでなく、年間数回以上も訪れる個人客（リピーター）が観光の7割を支えている実態がある。事前に児童にアンケートした結果、本学級の児童は、観光客は前述した有名な観光地を巡るために沖縄に来ているとの認識にとどまっている。こうした児童の意識とリピーター客が多い事実とのずれを扱うことで観光の視点から沖縄県のもつ本当のよさに気付いてもらいたいと考えた。また、単元の後半では、内容エに関わって、多くの国内外からやってくる観光客が気持ちよく観光を楽しむために、エコロジー・モビリティ（環境に配慮した交通選択）の視点から自県の交通問題に着眼させたい。沖縄島には大都市圏並みの交通渋滞が発生しており、県民でさえも切実な問題に感じている。交通渋滞問題は、観光客にとって切実であり、那覇市内や恩納村の海岸道路などはときとして激しい渋滞が発生すること、レンタカーの返却時間にゆとりを持つようにと指示され、観光客は制約を受けていること、などの問題に気付かせたい。「住んでよし、訪れてよしの沖縄県」を実現するためにも、単元終末時に作成する「わたしたちの沖縄県観光振興プラン」づくりを通して、この単元が自分のこととして主体的に受け止められるように促していきたい。

指導に当たっては観光からみた沖縄県のよさをメインにおき、伝統・文化を生かしたまちづくりの事例地として南風原町の緋の里づくりを、また自然環境を生かしたまちづくりへの事例として、海水と気候を生かした天然塩の生産に励む粟国島を扱いたい。観光を通して、沖縄の本当のよさを意識させるきっかけとして、リピーター客の観光目的である「保養・休養」着目させ、見えにくい沖縄県のよさについて深く思考させ、その中で、児童が仲間（ペア・グループ・集団）やゲストとの協同の学びを通して自分や仲間の考えを吟味し合い問い直していく中で、「沖縄県の観光が盛んであるということの意味の追究」を自分ごととして追究していこう。その結果、自県のよさに対する見方・考え方が社会的に更新される学びを目指したい。

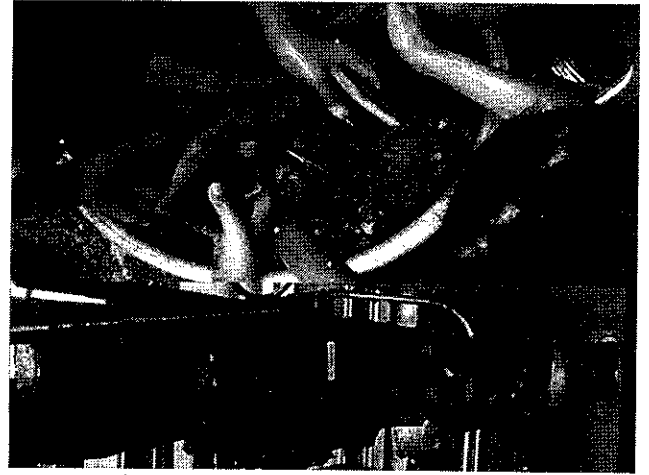
3 単元目標

- ① 見学や体験、資料活用などを通して豊かな伝統・文化や自然を生かしたまちづくりが、観光の盛んな沖縄県の魅力を高めていることを知る。
- ② 沖縄県の観光が盛んであるということの意味を追究するために、観光目的である「保養・休養」に着目させ、その背景について仲間と吟味し合い、自県のよさに関する見方・考え方を更新する。

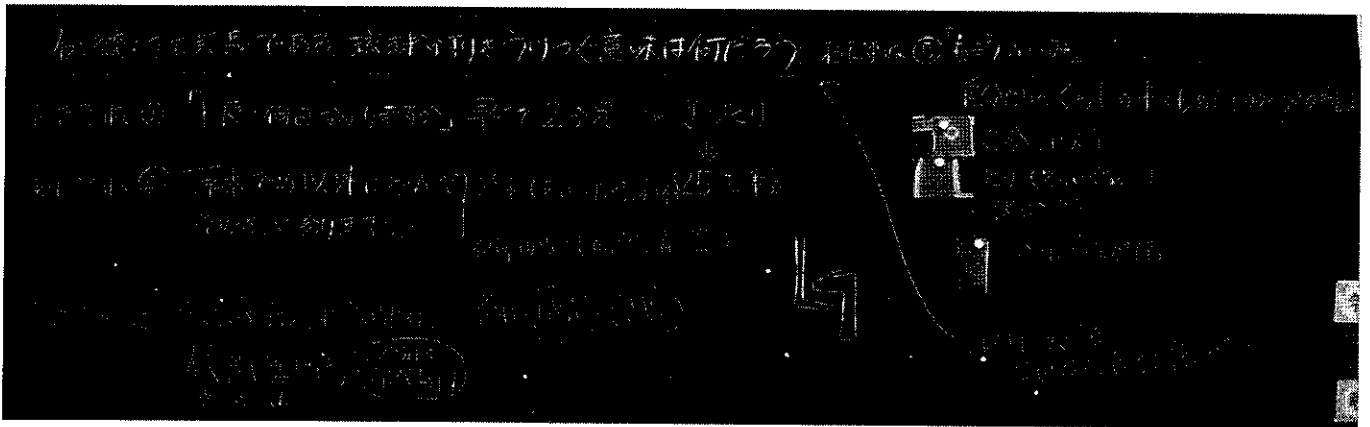
4 授業の実際 全33時間（内7時間は総合）【 】内は学ばせたいことと教師の働きかけ

第1時～第12時を含む全リフレクション（別紙参照）

第9～13時（見学）【伝統や文化を活かした町づくりの例を知るために、南風原町のかすり会館でかすりの工程を体験しその周辺を散策する】



第14時【伝統工芸品である琉球餅を受け継いでいく意味を知るために、見学で学んだことをビデオやワークシートで整理しながら明らかにする】



【授業のできごと】

子どもたちの追究課題を再確認して、全体で共有していった。「大城さんが、なくしたら困るっていつていた」というつぶやきから、「なぜ、なくしたら困るんだろう」へつながった。子どもは、25工程を手作りで行い、一反織り上げるのに2カ月以上かかることから、大変な思いをしているからなくしたら困るという思いを見学で体験したことを思い出しながら話っていた。

【授業のリフレクション】

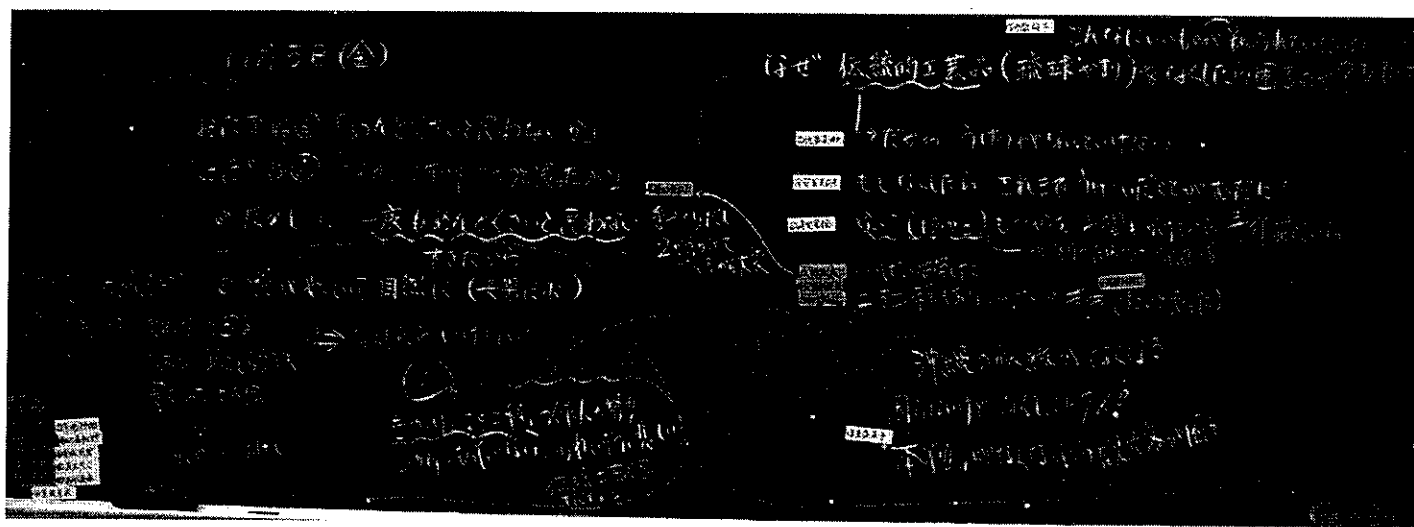
おたずねを1つ一つ確認していった。そうなると、一問一答になり、学んだことが実感を伴わないと感じた。やはり、体験で学んだことに必然性をもたせ、体験と知識がつながるためにも、授業の導入か

ら問い（子どもの見学に向けての追究課題でもある）を投げかけて進める必要があった。板書のように問いは設定されているが、それとおたずねをつなげる手だてがなかった。単に答え合わせになってしまった。

【次時の構想】

今回は、「なぜ、なくしたら困るのか」から伝統工芸品を受け継いでいく意味へつなげたい。その時に、「高価であるわけ」を視点に授業を展開していきたい。そうすることで、体験で学んだことを動員させて語ることになるであろうと考える。

第15時【琉球絣の本当のよさに気付くために、高価であることのわけを、これまで学んだことをもとに考える】



【授業のできごと】

子どもたちのおたずねだった「大城さんは、なぜ、絣を継ごうと思ったのか」から授業を進めた。訊いてきたことを次々に答えていく中で、「大城さん（絣工房）がなくなったらいけないからとってた」という子どもの声から「なぜ、伝統工芸であるかすりをなくしたら困るのか」について話し合った。「もしなくなったらこれまで受け継いだことが無駄になる」「絣を仕上げるまでには、手作業で25工程もの苦労があるし、手間がかかるから」との意見に対して「高いから300円セールする」「売れないと困るから安く売って宣伝することで、広まるし、大城さん達も売れたら嬉しい」に分かれた。しかし「あんなに大変な思いをしているのに安くできないし、価値が下がる」というようになかば、対決ムードになっていたのので、教師が「伝統工芸品がなくなっても君たちは困らないよね」と問いかけた。すると、子どもは「困らないけど、本物がなくなったら、これをめあてにしている観光客が困る」「沖縄の伝統がなくなる」と答えた。最終的に子どもにどうしたいかと問うと「高い理由は手づくりだし、25工程もの手間や心が込められているからだ。しかし、高すぎて買えないし、もうけも少なく、広まらないからどうしたらいいんだろう」ということに整理された。最終的には、有名にしたいし、広めたいとの思いは全員一致した。

【授業リフレクション】

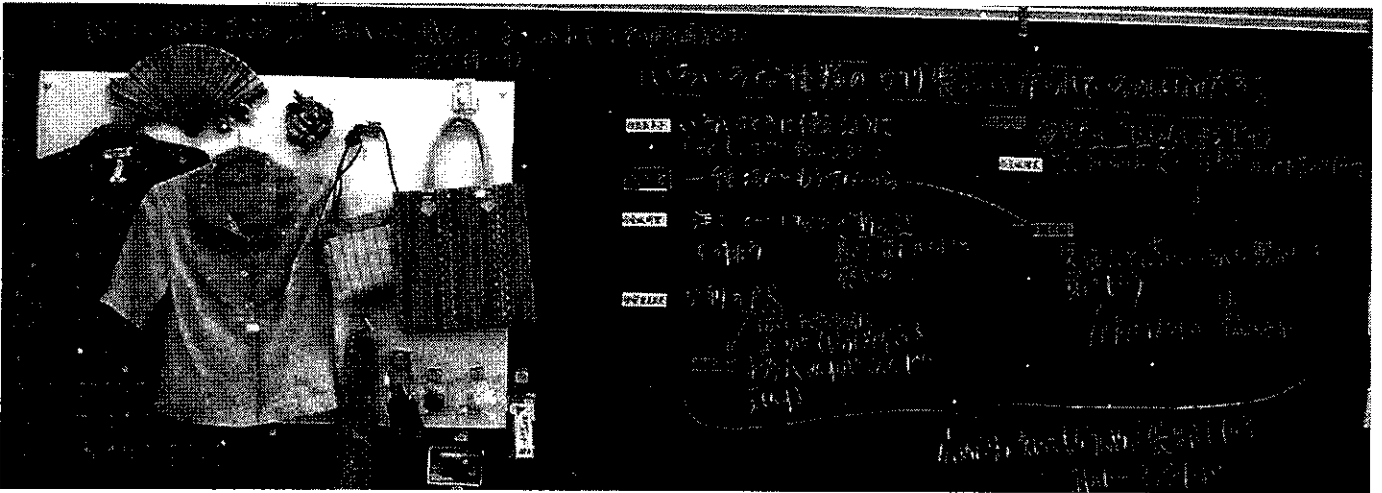
子どもたちは、話し合いに積極的に参加していた。しかし、途中からけんか腰になり、意見のぶつかり合いになってしまった。そのままだと、よりよい話し合いにならないと判断し、途中、子どもで話し合いを整理させた。沖縄の伝統を広めて有名にしたいのは双方の思いであることを教師が子どもたちに伝えると納得した。今、リフレクションをしている中で気付いたのだが、対立傾向になりがち

話し合いの時の教師の働きかけとしては、①双方の言い分を途中で子どもに整理させる②整理する中で接点を見つけさせる③最初の問い（課題）に戻し、何のために話し合っているのか確認する④個人攻撃にならないように、〇〇さんの意見と同様の人の意見を聴く⑤途中隣同士で意見交換する協同の学びの場を設定する、などである。

【次時の構想】

「子どもたちの広めたいけど高価だから売れない」という問いから、授業を展開したい。また、対立する状況にならないように、常に話し合いの目的（何のために話し合っているのか）に戻り、できるだけ全員参加出来るように、ペアでの意見交換の場を設定する。

第 16 時【琉球絣のよさを伝えるための絣組合の努力を知るために、いろいろな商品を提示して、その商品が作られている訳を考える】



【授業のできごと】

前時の子どもの問いである「高い理由は手づくりだし、25工程もの手間や心が込められているからだ。しかし、高すぎて買えないし、もうけも少なく、広まらないからどうしたらいいんだろう」を受けて、本時の発問である「いろいろな種類の絣製品が作られているのはなぜだろう」を設定した。教師としては、これらの絣製品が前回の子どもの問いを解決する教材になると考えていたからである。しかし、子どもの反応が思ったよりもよくなかったのである。「意味がわからない」「何を書いていいかわからない」などのつぶやきが聞こえ、ノートに自分の考えが書けない子が意外にも多かったのである。また、一問一答のような学びになり授業が活性化しなかった。

【授業リフレクション（対話）】

参観者（大学の道田教授）と対話リフレクションを行った。参観者が見取ったのは、子どもがあまりノートに自分の考えを書いていないことである。それは、教師の問いが曖昧だったのでとの考えだった。今回の問いは、とてもわかりやすいものだと考えて望んでいた自分にとって言っている意味がわからなかった。この問いがどのようにして生まれたのかということを知られた。前時とつながっていないような気がするということである。それは、前時の子どもたちの「広めたいけど高価だから売れないからどうしたらいいんだろう」という問いからつなげたものだった。しかし本時の問いは「いろいろな種類の絣製品が作られているのはなぜだろう」である。なるほど。よく考えてみると、つながっているようでつながっていない。教師の問いが出来上がる過程を考えてみた。すると教師の問いは、あるステップを経た問いになっているのである。つまり、子どもの問い「広めたいけど高くて売れない」→「売るための努力・工夫」→「絣組合の考えた、いろいろな絣製品」→本時の問い「いろいろな種類の絣製品が

作られているのはなぜだろう」が生み出された。つまり、それを考えることで、子どもの問いの解決になると考えたのである。しかし、それは、子どもにとっては、途中のステップを知らないうえに、つながらない問いになってしまったのだ。だから、子どもにとっては曖昧な方向性や考えの定まらない問いになったのだ。よりよく考えさせるためには、問いに必然性をもたせることが大切であるということを改めて感じたし、こういったところから教師と子どもの思考のずれが起こると言うことに気付かされた。

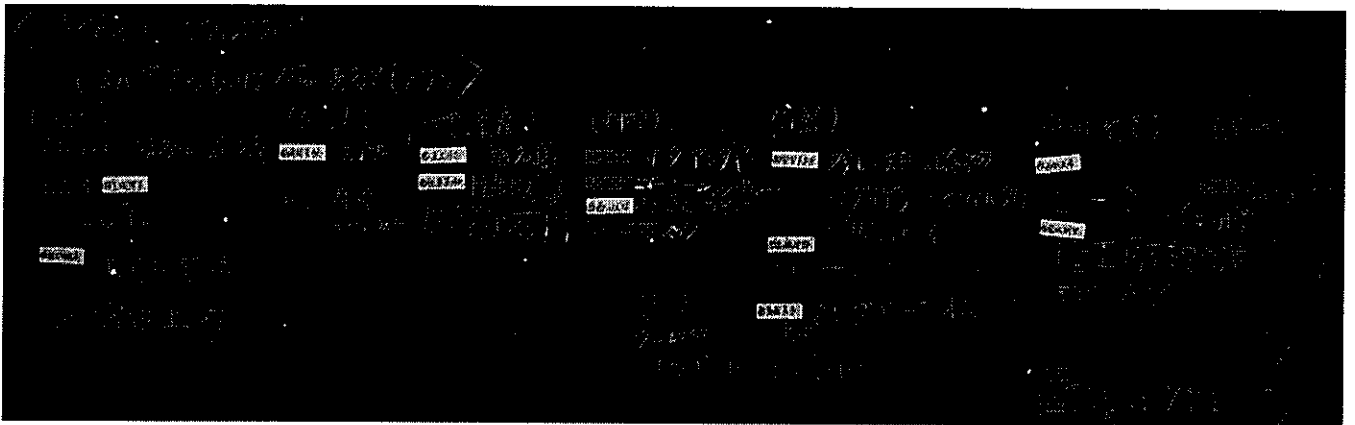
【次時の構想】

問いの設定の仕方は色々あると思うが、今回のように子どもに必然性をもたせ、教師と子どもの思考のズレが起こらないようにするために、できるだけ子どもの声から問いを設定していく方向でいきたい。授業の最後にSのつぶやきである「沖縄の自慢（よさ）は絣だけでない。他にもあるよ」を次回につなげ、焦点化した沖縄のよさである「琉球絣」から広がりをもたせ、学びを深めたい。

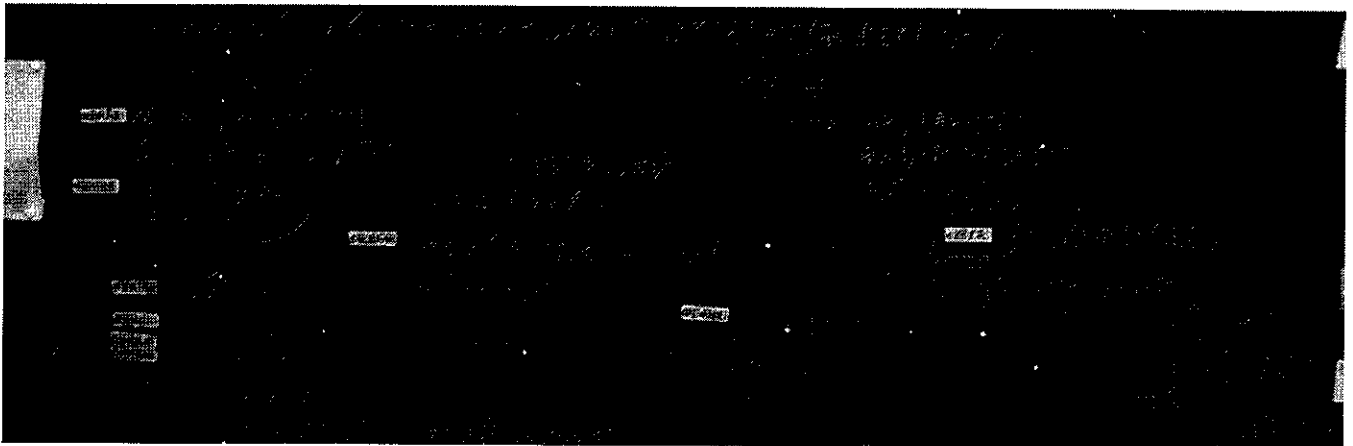
第17時～18時【沖縄には琉球絣以外にも観光資源が多くあることに気付き知識を増やすために、「めんそーれー沖縄観光学習 p 16～26」の教材から調べる】

○ 考えたくなる問い「沖縄には、琉球絣以外に自慢できるものは何があるだろう」

【第17時】



【第18時】



【第17時～18時の授業のできごと】

17時は子どもの問いからスタートしたことで、教材（めんそーれー沖縄観光学習）から次々に調べていた。教材の内容には、はじめて知ったものや、そうだったと思い出したものがあり、ほとんどの子が集中して参加していた。しかし18時は、子どもの集中力が停滞してしまった。

【授業リフレクション（個人）】

17時と18時は内容的にあまり変わらない。それなのに子どもたちがこんなに集中力が違うのか。その違いについて考えてみることにした。17時は、調べたことを子ども自らが板書していることだ。また、

板書できなかつた子は、自分の考えを発言していた。つまり多くの子どもが授業に参加する状況があったのだ。18時は、子ども一人ひとりの考えを教師が板書していったのだ。従って参加する子どもも限られていると言うことに気がついた。また、内容的に17時の授業とにているので、中だるみしていきのかわかった。そこで、教師は、授業中に授業の方向性を変更し、数多くの沖縄のいいものを出し尽くすというよりも、ある内容に絞ってそれらを深めていこうと考えた。具体的には、①沖縄の自然である地形や位置、景観②沖縄の季候③エコツーリズム④沖縄戦である。いずれも、教材に沖縄の魅力として載っている。方向転換したところからようやく子どものエンジンがかかってきた。①については、「なぜ、沖縄は固有種多く、また珊瑚礁やマングローブなど自然が豊かなのだろうか」と問いの形にした。問うことで、教材に書かれている内容を活用する必然を作りだしたのだ。②の亜熱帯気候は①につながるものである。③は①②の自然の大切さを理解することと、次回行う観光産につなげるものにした。特に④については、子どもは沖縄戦が魅力と書いてあるのに違和感を覚えていた。「なぜ、魅力なのだろうか」の問いを皆で考えることにした。ひめゆりの塔や平和の礎の存在の意味を追究した結果「二度と戦争を起こしてはいけない」ということをみんなに知らせるという意味で沖縄のよさにつながったのだ。ここで、気付いたのは、まず、調べ学習を単に答えさがしにしないことである。問いを出して、その問いに対して、調べたことを活用して答えるということである。つぎに、「なぜ？」を追究させるのである。つまりその事象や事物の意味の追究につなげるのである。いずれも必然性である。

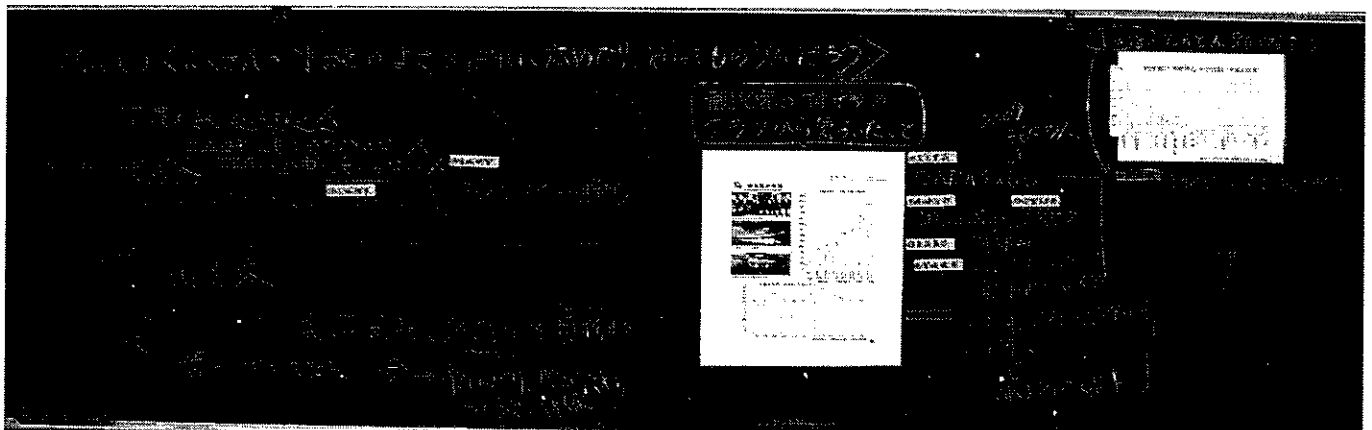
最後に、内容が多い場合には、焦点化されるように、キーになるものをピックアップすることである。改めて、自己リフレクションで授業のできごとを比較することで、新たな気づきが生まれた。

【次時の構想】

次時では、事象や事物の意味の追究ができるように「なぜ？」を意識したい。つまり、子どもが考えたいくなるような問いである。(思考の拡散と収束を意識したい) また、全員が何らかの形で参加できるように、必然性がある問いや学習形態(近くの仲間やペアでの情報交換、ネームを使った意思表示など)を創りだしていきたい。

第19時～20時【たくさんの沖縄県のよさを観光客視点から捉えるために、観光の概要(観光の意味や観光客数の推移、観光地)について「めんそーれー沖縄観光学習p」の教材から調べる。】

<よりよく考えさせるための問い>「たくさんの沖縄のよさは、だれに広め、知ってもらおうだろうか。」から、①②③につなぐ(①観光とは②観光客数③観光地)



【第19時～20時の授業のできごと】

第19時で、子どもは、沖縄のよさを誰に広め、知ってもらおうのかの問いに対して、「沖縄をよく知らない人」「県外や県内の観光客など世界中の人」という意見が出てきた。「沖縄に来たことのない人や

沖縄のことを全部知らない人」というKの意見から、沖縄の全部というのは、沖縄のよさ（自然、文化、料理など）であり、それを伝える対象は、「観光客」ということに整理された。その後、観光の意味を調べたところ、美しい風景や名所を見物するがわかってきた。また、「めんそーれー沖縄観光学習」からも、旅は昔は生きるためであるに対して、今は、楽しんだり、学んだり、くつろいだりなど、旅の目的が明確化した。

第18時は、「どれくらいの観光客が沖縄に来ているのだろうか。グラフから気付いたこと話し合おう」の問いからスタート。年々増えているし、8月に特に多い。次第に、月を問わずにだいたい、年間として来ている。という2つの統計資料（年次、月別など）の読み取りから推測していた。その後、Sの「だんだん新しくなっている」という「観光客の沖縄滞在中の活動」の統計を根拠にした考えからは、なぜか集中力がとぎれてきたことが、よそ見や落書きなどの子どもの姿から顕れてきた。

【授業リフレクション（個人）】

気付いたことのみを引き出して、疑問を問うてないのである。だから、変化のない授業の展開になっていったのである。つまり、子どもが考えたくなる問いが設定されていないのである。これは、最近よくやってしまう傾向である。特に調べ学習のような知識を習得させる学びの中で起こっているような気がする。今回設定した問いも「気付いたことを見つけよう」と、やはり曖昧である。①「観光客が増えてきたのはどうしてだろう」や②「観光客が増えると沖縄のよさが伝わるからいいよね。だから、もっとももっと増えていった方がいいよね」など、子どもの思考を刺激するようなものつまり、考えたくなるような問いが必要である。①は、沖縄に魅力がある→魅力は何かな→これまで学んだことを総動員させて語る（沖縄のよさ）→めんそーれー沖縄観光学習から新たな根拠である、道路、港、空港、ホテル観光施設の整備の充実へ広がる。そこで②のそれならもっとももっと増えていった方がいいよね。→増え続けた方がいい・増え続けるとだめ（困る）→よさは伝わるけど、環境が破壊される→よさがなくなる→本時のリピーターの目的である保養・休養ができなくなる→矛盾である。保養・休養したい観光客がそれをできない状態をつくってしまう可能性がある。リピーターが「保養・休養」を求めている沖縄のよさをどう守っていくのか。などのように本時とつながる授業を展開できるのである。子どもは、沖縄のよさを更新するだけでなく、更新された沖縄のよさをどう守り、持続させていくかという「エコツーリズム」へもつながる。

【次時の構想】

問いは「観光客が増えてきたのはどうしてだろう」か「こんなに多くの観光客は、何を目的にわざわざ沖縄にきているのでしょうか」で行う。→第17時～18時に学んだことを、総動員させて語る。（沖縄のよさと観光の視点に立って考えから授業を行い、沖縄のよさを再確認する。さらに「観光客が増えると沖縄のよさが伝わるからいいよね。だから、もっとももっと増えていった方がいいよね」の問いへつなげ、「保養・休養」と「持続可能な観光」についての布石にしたい。また、本時につなげるために、リピーター、ビギナーの意味について教える。

5 本時 (第 22 時)

(1) 目標

- 沖縄県を訪れる観光客は、その7割をリピーター客が占めている事実を知ることができる。
- 自県のよさに関する見方・考え方を更新するために、リピーター客の観光目的である「保養・休養」に着目させ、その背景について仲間と吟味し合う。

(2) 創り出したい学び

<めざす子どもの姿>

授業前：見える沖縄のよさがわかっている（自然・歴史・文化・食・行事・イベントなど）

授業後：見えにくい沖縄のよさに気付く（「のんびり・癒し」「沖縄の人の魅力」）

<よりよく考えさせるための視点>

○見える沖縄のよさ（自然・文化・歴史・食べ物・イベント・行事など）

○見えにくい沖縄のよさ（沖縄の人の魅力・癒し・のんびりできる）・・・保養・休養

<子どもの学び>

何度も（20回以上）来県しているリピーターの観光目的から沖縄のよさに関する見方・考え方を更新する授業を展開する。

具体的には、データ（観光客のビギナー・リピーターの割合の推移）の事実から「何度も沖縄にきたくなる秘密は何だろう？」の問いを引き出す。そこで、その根拠について、仲間と吟味し合いながらこれまでの体験や資料から学んだ、沖縄のよさ（自然・歴史・文化・食・行事・イベントなど）を総動員させて語るだろう。

そこで、沖縄の「見えるよさ」に執着した子どもの固定概念を崩すために「観光客が感じる沖縄の魅力」についてのデータを提示する。観光目的上位項目が「のんびり・癒し」「沖縄の人の魅力」という意外な事実から視点を広げることで、これまでの学びを仲間と吟味し合いながら振り返るであろう。このような学びを創り出すことで「のんびり・癒し」「沖縄の人の魅力」という沖縄の「見えにくいよさ」の具体的な中身を探ることで、本当の意味での沖縄のよさについての見方・考え方が更新されるであろう。

<子どもの見方・考え方の価値の更新を何で見るか>

授業中の子どもの発言

「やさしいから」「元気がある」「病気がなおる」「都会みたいにごちゃごちゃしていないから」「方言がいい（やさしい喋り方）」「海をみると気持ちいい」「空気がおいしい」「あたたかい」など。

学びの記録（ノートや振り返りシート）

見えにくいよさについて触れているなどの気付き。

主な学習活動	予想される子どもの姿	個をつなぐ教師の働きかけ
①グラフ（観光客のビギナー・リピーターの割合の推移）の読み取りを行う。 追究課題	C：青はビギナー赤はリピーター C：ビギナーは減ってきて、リピーターは増えてきている。 C：2008年はリピーターが76,8%でほとんどである。	①グラフを正しく読み取るために、全体の観光客数は、リピーターやビギナーの増減に関係なく増加してきている事実を押さえる。
何度も沖縄にきたくなる秘密は何だろう？その理由を考えよう。		
②その理由を考えノートに書く。 ③ペアで情報交換する ④全体で吟味する	C：海がきれいだから C：食べ物がおいしいから C：あたたかいから C：イベントや行事がめずらしいから C：自然や多くの固有種がいるから C：景色（景観）がいいから	②何度も来たくなるだけの魅力（秘密）に着目するために、ディズニーの例を挙げ子どもの素朴概念を引き出す。 ④根拠をもとにリピーター観光目的を考えるために体験やこれまで学んだ既習知をもとに考えさせる。
⑤観光客が感じる沖縄の魅力についてデータからとらえ、それらが示す意味（どういうことなのか）について考える。 問い	T：1位は？C：海だと思う T：2位は？C：食べ物～ T：3位？C：伝統文化かな？ T：沖縄の人の魅力が21%だよ C：え～沖縄の人が魅力って？何だろう T：のんびり・癒しが14,3%だよ C：のんびりしたり、癒されに来るの何度も？ どういうことなんかな？	⑤子どもの固定概念とデータが示す事実との大きな差を示すために、データーを効果的に提示していく。
のんびり・癒しになることってどんなことだろう。また、人の魅力って何だろう？		
⑥自分の考えやそのわけをノートに書く。 ⑦ペアで情報交換する ⑧全体で話し合う ⑨学んだことを振り返りカードに記入する。	○ のんびり・癒し C：景色や海がきれいだから疲れがとれる C：電車がないからのんびりできる C：人があまり多くないから疲れない C：あたたかいから ○ 人の魅力 C：優しい人 C：笑顔がいい C：元気がいい C：明るい T：沖縄のよさについて見方や考え方が、これまでと変わったところはないですか。変わったところを書いてください。	⑥観光客がここまで何度も来たくなるような、のんびりや癒しってどんなことを言っているのか具体例を考える。 ⑧自県のよさを再発見・再認識するために、のんびり・癒し、沖縄の人の魅力の背景にある意味を追究させる。 ⑨自県のよさに対する見方がどのように更新したのかを「見えるよさ」「見えないよさ」の視点から子どもの言葉で整理させる。

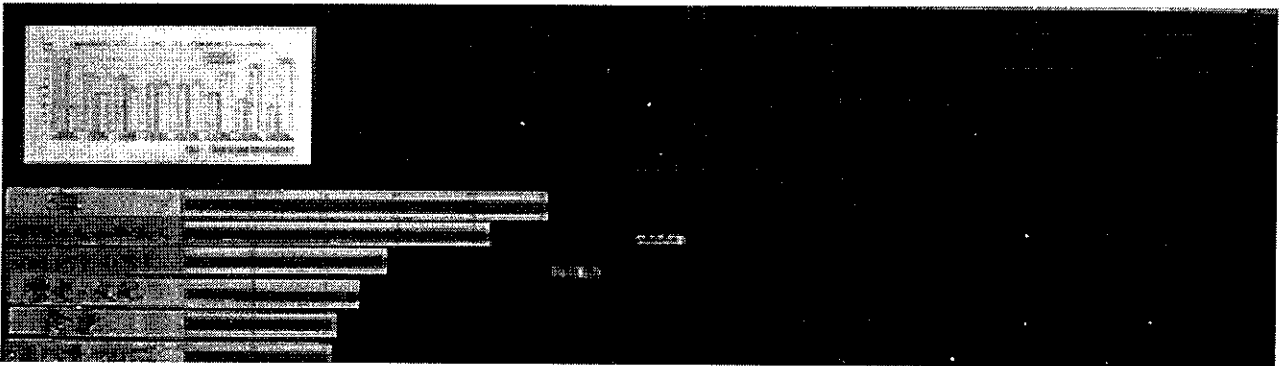
<本時以降の学びの計画>

本時の追究課題である、リピーター観光客の目的である「沖縄の人の魅力・癒し・のんびりできる」の意味について解決するために、空港へ行き観光客へインタビュー調査する。その後、事実を確かめ、沖縄のよさについて明らかにしながら、学びを深める。

また、観光客が増えていくデメリットつまり課題の部分（環境が悪くなる）については、視点は色々あるが、今回は、観光客が利用するレンタカーと排気ガス（CO₂）の問題を取り扱いたい。

その中で、観光客が増えても大丈夫なようにエコロジー・モビリティ（環境に配慮した交通）の観点から、沖縄島の交通問題の存在に気付き、改善策を考えさせたい。

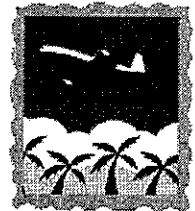
○第23時～25時（総合）（空港へ行き観光客へインタビュー調査）



○第26時～第27時（アンケート集計）

アンケートは、以下の項目で行った。沖縄を訪れる観光客は、移動手段として、全体の9割近くがレンタカーを利用することが判明した。それは、子ども当初、予想していたことと同じであり、リピーター観光客が、レンタカーを利用している傾向が強いことにつながっている。

「観光客が感じる沖縄県についてのアンケート」



お急ぎのところすみません。私たちのアンケート取材にご協力お願いします。

○ビギナー客（ ）リピーター客（ ）

① 年齢

10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代以上

②同行者

一人で 夫婦 子ども連れ家族 その他家族 知人・友人・恋人と
仕事仲間と その他

③宿泊先

ホテル 旅館 知り合いの家 その他（ ）

④なぜ、沖縄にきたくなるのか。理由を書いて下さい。

⑤沖縄の観光ベスト3を書いて下さい。

1位（ ）

2位（ ）

3位（ ）

⑥観光をするとき、とくにどんな乗り物を利用しますか

（ ）

⑦、⑧は沖縄県観光課が調査した結果わかったことです。その理由を聞かせて下さい。

⑦沖縄の人のどんなところに魅力を感じますか

⑧沖縄でのんびりできたり、癒されるのは、なぜですか。

⑨また沖縄を選びたいですか。そうだという方も、そうでない方も理由を聞かせて下さい。

* ご協力ありがとうございました。観光客の方が喜んでもらえるために私たちもがんばります。

○アンケート取材時の注意すること！

- ① 同じ人に取材しないこと
- ② 相手の都合を考えること
- ③ 安全に気おつけて取材すること
- ④ また、沖縄にきたくなるような、沖縄の印象がよくなるような取材をすること
- ⑤ ていねいな言葉づかいをすること
- ⑥ あいさつをわすれない

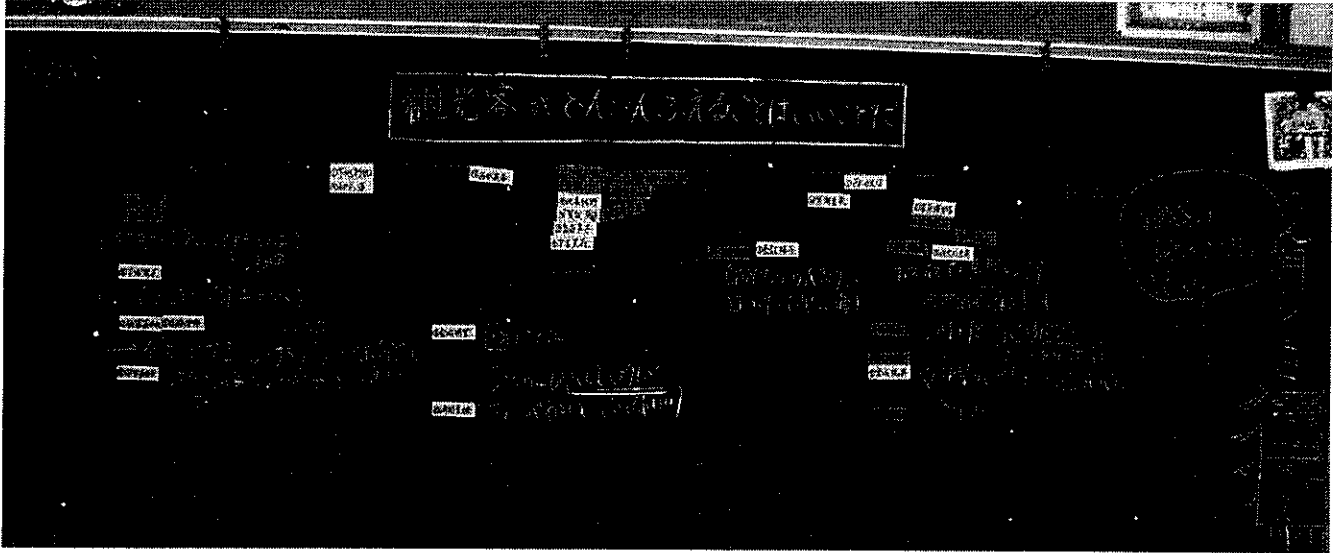
○アンケート取材の手順

- ① あいさつをする「おはようございます」
- ② 今お時間大丈夫ですか
- ③ 私たちは琉球大学附属小学校4年3組のものです。沖縄の観光についてアンケートを行っています。4、5分お時間を頂けますか。ご協力お願いします。
- ④ このアンケートに答えて下さい。(えんぴつとアンケート用紙を手わたす)
アンケートが終了したら、受け取ってから。
- ⑤ お急ぎのところ、きちょうな時間ありがとうございました。

○集合時間：11：00までに（ ）の前に
11：00～11：30までお土産を買います！

○第28時～第29時：【美しい沖縄の環境を守るために国内外からの観光客が増えても大丈夫のようにエコロジー・モビリティ（環境に配慮した交通）の観点から、沖縄島の交通問題の存在に気づき、改善策を考える。】

<授業の様子>



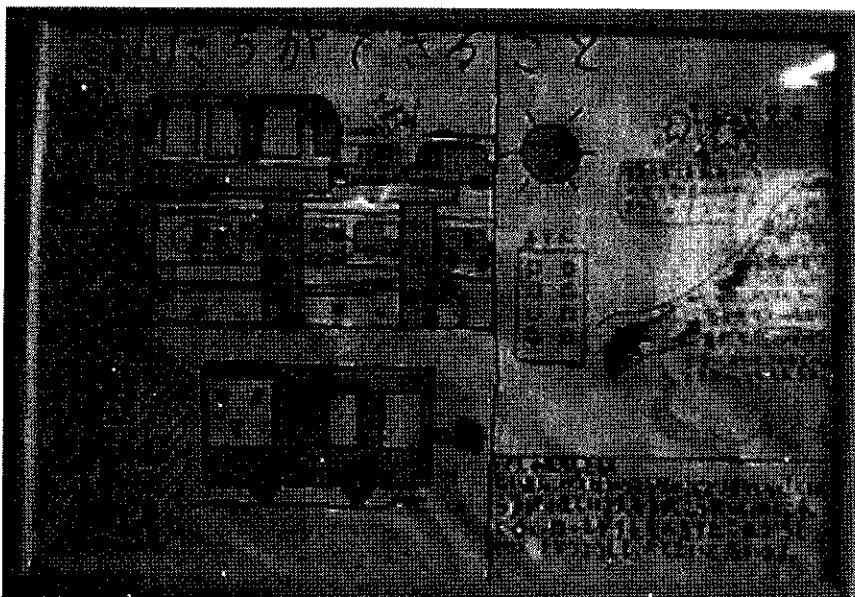
子どもたちの、追究によって、沖縄県の観光がもっと盛んになってほしいという願いと、一方で、レンタカー利用が増えることにより、交通渋滞や、路上駐車の問題が生じ、自分たちの生活にも支障をきたしていることが一種の社会的ジレンマとして、浮き彫りになってきた。

渋滞問題は、観光客にとっても、レンタカーの返却に支障をきたしており、観光客だけでなく県民にとっても自動車に依存しすぎた交通を考え直す必要があるのではという問題の広がりにつながっていった。

授業後、子どもたち自身も、近い距離の移動には自家用車を利用しないで、バスやモノレールなどの公共交通機関あるいは自転車や徒歩による移動に心がけることが必要だとの考えが生まれてきた。

また、CO₂の排出にこだわる子どもも生まれ、県の観光についての学習が公共交通の利用促進を促すことの大切さに気づく学習にまで発展できた。それらの意見を簡単に学習新聞風にまとめた。

<学習新聞の様子>



○第30時～33時
【新聞づくり】